

世界最初の幼稚園の創設者

フリードリッヒ・フレーベルの現代的意義



莊 司 雅 子

1 幼児尊重の教育

フリードリッヒ・フレーベルは今から百数十年前の一七八二年にドイツのカイルハウに生まれた人であった。そして一八四〇年にドイツの有名なチューリンゲンの森の片田舎、ブランケンブルクというところに、世界最初の幼稚園（キンデルガルテン）を創った。だからフレーベルといえば幼稚園、幼稚園といえばフレーベル、また幼児教育といえばフレーベル、フレーベルといえば幼児教育の父であるというように、フレーベルと幼稚園と幼児教育とは一体に考えられているほどである。ではなぜフレーベルと幼児教育とはこのように密接な関係にあるのであろうか。

フレーベルは世界中のだれよりも幼児を知り幼児を尊重し、幼児に生き、幼児を幼児として生きぬかした人であった。幼稚園という名称をつけたのは一八四〇年であるが、幼児教育の仕事を開始したのは一八三七年であった。しかしその前年の一八三六年にフレーベルは『生活の革新』という論文を出し、そのなかで「いざや、われらが子らに生きよう！」（Kommt, Lasst uns unsern Kindern Leben!）という標語を掲げて、世の人びとに幼児教育の重要性をうったえた。それから自らその仕事に出発したのであった。かれの幼児教育はまったく幼児尊重の心から、幼児のうちに秘められている絶対的なもの（フレーベルはこれを神性とよんでいる）に対する敬の精神から発したものである。

2 自己活動の教育

フレーベルによれば子どもの活動はすべて創造的なものである。しかもその創造的活動は、同時に自己のうちに秘められた神的なものの自己表現である。だから教育の課題は子どもがこのような自己表現を助ける以外のもではない。『人間教育』の基礎論でフレーベルが「教育も教授も本来その第一原理においては、必然的に受動的な追従的なただ保護的な防禦的なもので、決して命令的な断定的な干渉的なものであってはならない」と述べているのも、教育上自己活動を重んじなければならぬことを意味している。

フレーベルはつづけていっている。「われわれが植物や動物に空間と時間とをあたえるのは、かくすることによって初めて、これらの内的生命が美しく成長し発展することを知っているからである。またわれわれが植物や動物に休息をあたえるだけではなく、かれらに対する強制や干渉をとり除くのも、ひとえにかれらを眞の自己発展と健全な自己成長をねがうからである。

しかるになぜに若き人の子のみは、大人にとって欲するままに鑄型に入れうる蠟の一片、粘土の一塊でなければならぬか。もしわれわれが花園や畑や牧場や森を逍遙して、沈黙のなかに自

然がわれわれに教うるものを静かに聴くならば、そこにかれら植物が如何によく内的合法性を現わしているかを看取することができるであろう。だからはやくから本性に反して形式や規則を強いられ、そのために虚弱な不自然な姿をしているような子どもが、はたして立派に成長し円満に発達することができるであろうか」

このように考えてフレーベルはただただ神性なる人間の本性にしたがって、あらゆる命令的な干渉的な強制的な教育を否定し、禁止する。しかしかれがまた、生徒をよくみて、もし本来の純な姿が傷つけられているという証明が確かにできた場合には、もちろん厳格な命令的な教育法が採用されなければならないといっているのも、われわれは耳を傾けなくてはならない。

このことは今日、新教育の原理としてわれわれが子どもとの自発性を重んずべきことを強調している点である。教師が一方的におしつける教育は子どものためにはあまり役にたたない。子どもが自ら進んで学ぶものにして、はじめて子ども自身のものとなるのである。どうすれば子どもが自ら学習するかをくふうすることこそ教師の仕事である。

3 労作を重んずる教育

人間が生きているということは、フレーベルにしたがえば働く

ことであり、活動することであり、仕事をすることである。人間の使命とは自らのうちにある神性を、行為を通して表現することであり、また表現することによって神のように行動することである。人間は本来すでにこのように表現し、表出し、行動し、活動しそして創造するものである。しかも人間はこのことをみずから知って行なうものである。フレーベルの労作とは、だから人間が自覚的に自己の内的生命を形成し、表現していくことである。

人間が自己の内的本質を、行為を通して表現したり、具体的な行動に移したり、形あるものにしたたりすることが、フレーベルの労作の意味である。それは生きることそのことであり、活動そのものであり、仕事そのものであり、労働そのものであって、なんらかの目的のための手段ではなくて、目的そのものである。人間の活動を商品としてみたり、賃金をえるための手段であると考えたりするのではない。

フレーベルによると労働は神聖である。したがって人間の働きに上下貴賤の別があるはずはない。人間のすべての活動はそれ自身尊いもので、ひとしく価値あるものであり、すべて尊重されなければならない。

かくてフレーベルは教育上子どもの活動を重んじ、すべてを行動に訴えることに重きを置いた。かれは子どもをしてます

行動させ、そしてそれによって子どもが自己の行動から何を学びえたかを自ら求めさせ、それによって自己がなしようものを自ら発見させ、さらには自己自身について知らせようとした。

かれが『人間教育』のなかに教授の根本原理として述べている次の言葉がこのことを語っている。「あることをなせ。そしてその行為からいかなる結果が生じ、その行為がいかなる知識をあなたにあたえるかをみよ」これはすべてを行動を通して学ばせるべきであることを意味している。特に幼児の場合フレーベルが遊戯や仕事を重んじたのもここからきている。

4 遊戯と作業を重んずる教育

フレーベルは幼稚園を創設する十数年前から、幼児教育の根本は何よりもまず幼児を遊ばせながら導くこと、遊戯を指導すること、また幼児を楽しませながら同時に力を発展させることに努力しなければならぬと確信した。だから幼児の生命を保育する道は、主として遊戯であるといっている。

そこでフレーベルはまず遊戯理論の確立と遊具の創作に全力をそそいだ。フレーベルは遊戯と作業の教育的意義を強調した世界教育史上の第一人者である。「遊ぶこと、つまり遊戯はこの期における人間の発達、すなわち児童生活の最高の段階である」

なぜかといえ、遊戯 (Spiel) というドイツ語はフレイベルによればすでにその言葉が示すように、児童が自己の内界をみずから自由に表現したものの、自己の内的本質の必要と要求とに応じて内界を外界に表現したものであるからである。遊戯はこの期の児童の最も純粹な精神的なあらわれであり、同時にまた人間生活全体の模範ともいふべきものである。遊戯はそれ自身喜びであり、自由であり、満足であり、平静であり、また外界との平和であるが、さらにみる人にも、これらの感じをあたえるものである。

「遊戯はまたすべての善なるものでてくる源泉であるから、身体の疲れるまで、倦まずに落ちついて遊ぶ児童は、成長ののちには必ずや犠牲的に他人の安寧や幸福をはかり、ひいてはわが身の幸福をも増進するような、落ちついて根気強い有為の人間になるであろう。児童が熱心に遊びに没頭し、十分遊んでは疲れて、よく眠っているようすは、この時期の児童生活の最も美しい現象ではないであろうか」

このように遊戯はフレイベルにとって実に高い意義と価値とをもっている。かれによれば児童の随意の遊戯といえども、われわれはそのなかに将来の内的生活の芽生えを認めることができるという。児童のいかなる遊戯も、全生涯のいわば双葉である。というのは遊戯のなかに人間の最も純粹な素質や最も内なる精神が発

揮され顯示されるからである。

児童の遊戯や作業の大きな教育的意義を見出したフレイベルが、教育の実践にあたって如何に児童の自然の遊びを重んじたかは次のフレイベルの学園描写の一端からうかがうことができる。

フレイベルは世の親たちや教育者に向かって彼の教場に參觀にくるようすすめている。そしていっている。

「いろいろな利用されているこの部屋には大きな卓があるが、その上には積木の木材が入っている箱がある。その他、砂や鋸屑などもこの部屋にある。また美しい松林を散歩した際に持って帰ったきれいな緑の苔もおいてある。今は自由の時間である。子どもは各自思い思いに自己の仕事をはじめ。そこには机の隅の隠れたようなところに、小さな教会堂ができた。

この会堂は落着いた小さい子どもの創作である。——彼方にはまた、二人の子どもが共同して、椅子の上はかなり大きな建物を建て始めた。それは数層の高楼で、一つの城を造り上げようとしたものである。この城はちょうど山の上から谷を見下ろすような具合に、椅子の上に高く聳えている。——向こうの方では卓子の下にこっそり何か造っている。それは緑の丘で、上には崩れかかった城が立っている。——また他の二、三人の子どもの手で、彼方の平らなところに一つの村が展開されている。——さてみんな

の仕事は終わった。子どもたちは自分の造ったものや他の子どもたちがそれぞれひとりりで造ったもの、また共同で造ったものなどを眺めている。

すると彼らの頭の中に新しい考えや願いが起こってくる。というのは別々に造ったそれらの結果を一つの全体にまとめてみたいというのである。その考えが誰もの願うところであるということがわかると、直ちに共同の仕事が始まる。先ず村から古い城へ、古い城から高い城へ、高い城から教会堂へと一筋の大道が造られ、その間に牧場や小川ができる。

別の時にまたこの教場へ来て見ると次のような場面が見られる。二、三人の子どもは粘土で山水の景色を造った。他の一人は厚紙で家を造って、それに窓や戸口をつけた。またある子どもは彼方で胡桃の殻で小舟を造った。各自それぞれ自分の造ったものを眺めて満足する。しかしそれだけで孤立しては、何となく物足りなさを感じる。ふと隣りの子どもの作品と自分のと連結させたらさぞかしおもしろかろうと考える。やがて相談がまとまり、直ちに家は小高い丘の上に移されて、城のように立つ。小舟は小さな湖水の面に浮ぶ。そこへ一番小さい子どもが小さな牧者と羊とを持ってきて、丘の上と湖との間へおいた。

一同非常におもしろ味を感じた。そこで一同は手を休めて、た

たずみながら、自分たちの手になった作品に眺めいって喜びと快感とを感じるのである。眼を転ずると下の小川のほとりで何か大騒ぎが聞こえる。見るとやや年長の少年たちが運河をひらくやら、水門をつけるやら、橋を架けるやら、港を設けるやら、また堤防を築くやら、水車を設けるやら、で、それぞれ自己の仕事に没頭して他を顧みないともない位である。

しかし今、水を流さねばならない。それは当然高い処から低い処へ流れるから、それを利用して舟を高い処から低い処へ送らねばならない。ところが水が流れ、舟が下るに従って隣りの子どもの境界を侵すことになる。各自は所有者・創作者として相互に自己の権利を認めている。友だちの要求にも無理のないところがあがるが、しかし自己の権利も主張せざるを得ない。この問題はいかに調停されるか。——他に方法はない。ただ条約によるだけである。国家と国家との関係のように、彼らは互いに堅い条約を結ぶのである。

子どもたちのこのような遊びのうちに、いかに多くの意義があり、またそれからいかに多くの収穫が得られるか、それを各方面にわたって十分明らかに示し得ることは困難であろう。しかも次の二つのことだけは確実であり、真実である。

第一はこのような遊びは、幼年期における子どもたちの同一の

心意や同一の精神から出たものであること、第二は、右の遊びをした子どもたちは総べてよい子であったこと、彼らは記憶力もよく、理解も早く、思慮深くしかも実行的であり、勤勉家であり努力家である。言い換えれば、頭脳の点において、心の働きにおいて、有為にして、よく論じよく行なう子どもたちであること、そしてかような遊びをするような子どもは、将来注意深い聡明な有為な人間となるであろうということなどである」

5 個性と社会性を重んずる教育

フレーベルは個人・家庭・社会・民族・人類の関係を「部分的全体」という言葉で説明している。「部分的全体」とは個体はそれ自身としてみれば一個の全体であるが、それは一段高い全体の一部分であるということである。だからわれわれは全体の一部分であり、人類の「部分的全体」が人間である。そしてこの限りにおいて人間は人間になり、また全体的人間になる。人間はまた全体の成員であるが、同時に全体であり部分である。

だから各人は子どもの時、すでに人類の必然的本質的成員として理解され、認められ、そしてはぐくまなければならない。フレーベルは新たに生まれた子どもを単にその家族の一員としてみるだけではなくて、もっと広く全民族、いな、全人類の一員とし

てみなければならないといっている。したがって児童の成長発展は直接人類の成長発展に関係するという。われわれは常に人類発展の現在・過去・未来の必然的結合において、児童を観察し取扱わなければならない。

フレーベルは次のように述べている。「子どもの教育は人類の発展に対する現在・過去および未来の要求と結合し、調和し、一致しなければならぬ。神的素質と自然的素質と人間の素質とを有する人間は、神と自然と人間とに関係し、統一性と個性性と多様性とを自己のなかに含み、それ故に同時にまた現在・過去および未来をみずからのなかに秘めているものとして観察され、注意され、そして取り扱われなければならない」

フレーベルによると「家族の一員としての児童の行路が家族の本質、すなわち家族の精神的の素質と力とを調和的に多方面的に、明瞭に発展し表現するにあると同様に、民族の一員としての人間の行路と使命とは、全人類の力と素質とを發展し、教化し、そして表現するにあるということにある」この考えはややもすれば個人は全体のために自己の立場を没却されるおそれがあると思われる。

ところがフレーベルによれば、個人あつての全体、全体あつての個人であるから、個性と社会性とは相互の否定的媒介において

のみ自己をあらわすことができる。だから「家族の成員が自己を最も完全に、最も明瞭に、最も多面的に、そして最も固有な方法で、最も個性的に發展し、表現する時は、すなわち両親および家族の本質を児童すなわち家族の成員が最も完全に表現していることになる」

フレーベルは有機的自然觀の立場に立つて個と全体との關係を考えているから、個々人はそれぞれの職場において、与えられた地位において、他との關連のものにもっとも個性的に表現することによって、初めて全体を完全に表現することができるという。フレーベルが教育上特に児童の遊戯や作業のもつ価値を高く評價したのもここからきている。いな恩物の創作もこの原理からきており、幼稚園の創設もこの精神からきているといつてよい。特に遊戯や作業のなかにフレーベルは幼児の個性と社会性を見出しそれを伸ばすことに努力していた。

6 新しい宗教教育

宗教教育に対してもフレーベルは進歩的な考えで行なっていた。彼にすれば宗教上のある格言はとかく一方に偏していいあらわされているために、却つて人間の生活にとつて本来あたえるべきでないような感化をあたえるものがある。たとえば宗教教育な

どで特にたいせつとされているが、しかし一般に人の生活や幸福、さらに不断の進取的努力の精神などにとつて甚だ妨害となるような格言、すなわち「善良なものはいはあわせである」とか「善良なるものは報いがある」とかいうような格言がこれである。まだ經驗に乏しくいわば自己中心的な単純な子どもにとっては、内的の善と外的の善、内的の幸福と外的の幸福、内的の生命と外的の生命とはまだ分たれてはいない。

それであるからこのような格言は子どもだけではなくて、一般に人間の内部的な平和と力とをはやくから妨害したり弱めたりすることはないとしても、少なくとも人に人生に対して全く誤った期待をもたせたり、自分の生活上のできごとについて全く誤った判断を下したり、全く誤った解釈や応用をするようにさせたり、ついには人生に全く失錯させるような結果をもたせたりするにちがいない。

フレーベルの宗教教育はこのようなものではなくて、もっと積極的なものを要求している。そしてむしろ次のような原則を立てて、これを子どもやおとなに經驗的に証明させるべきであるといふ。その原則といふのは「およそ眞に誠実と努力と犠牲的精神とをもって善を求めるとは、必ず外部の圧迫や外部の苦痛や窮乏、外部の心配や困難、外部の欠陥や災難や欠乏に遭遇するであ

ろうし、そしてこれと戦って生きなければならぬものである」
フレーベルはこの世で報いられない善良な業績や行為は来世において必ず報いられるというようなことが、宗教上の教訓や教授においてしばしばとり立てて唱えられているが、このような教訓は有害であつて、こんな教訓を授けるぐらいなら、むしろ宗教教のないほうがまだましであるという。

またこんな教訓は人間に生来あたえられてある目的を達成する上に最大の妨害となるものである。こんな教訓は肉欲的快樂をもつて最上の幸福と考えているような無教養な劣等な人間には、何の効果もないし、また生来善良な心をもつた子どもやおとなにとつては、このような教訓の必要を感じないのである。なぜならばわれわれの生涯が純潔であり、われわれの行為が正善であり、そしてわれわれの業績が善良でさえあれば、何も来世の報酬を求め必要なないからである。

人間をしてその天性や天職や使命に恥かしからぬ行為をなさしめるためには、来世の報酬という刺激剤が加えられなければならないと考えるのは、人間の本性を知ることの浅薄と、その品位をみることの軽薄とを示すことである。

フレーベルによればもし人が幼年期から純粋な人間たるべく教育されたならば、かれはいかなる瞬間にも自分の品位と本性とを

感ずるように導かれることができるであろう。そして自分の品位や自分の本性にしたがつて忠実に生活し、活動してきたという感じや意識こそは、かれにとつていかなるときにもかれの行為に対する最高の報酬であつて、そのほかに何らの外部的な報酬も無用であり、ましてかかる外部的な報酬の要求されることもないのである。

たとえば純真な自然的な善良な行為をした子どもは、自分が立派な行為をしたということを自覚した喜び以外に、自分の行為に対して何かもつと報酬を考へるだろうか。たとえ称讃ということだけでも考へるであろうか。フレーベルの宗教教育の目標は、まさに人々をしてこのような内的喜びを自覚しうるようにさせることにある。この立場は功利的・打算的になりやすい現代人にとつて一服の清涼剤にならないであろうか。

7 体育論

身体は自分に一番近いものである。しかしそれだからといって、人は身体のことをよく知っているとさえない。ことに幼年においてそうである。フレーベルのいうようにたとえば四肢はわれわれの身体と一つになっているからといって、それでわれわれは直ちに自分は四肢を自由に使用しうるものと考えてはならない。

われわれは自分の力を知るだけではなくて、さらにその力を使用する手段をも知らなければならない。

ところでその手段をも知るようになるには身体の諸部分を調和的に発達させる必要がある。このように四肢や身体の発達をまっぴらからその使用を訓練することを、フレーベルがその時代にすでに強調していたということは全く卓見であるといえる。今日の最もすんだアメリカの心理学者とよばれている人たちは、最近しきりにこのことを説いている。すなわち子どもの側の用意ができてからでなくては、訓練しても無駄であるということである。

フレーベルは習字とか図画とか奏楽などを例にとつて説明している。すなわちもし生徒が幼年期から身体や手足が真に円満に発達し、その使用も平均してかたよらず、自由自在に四肢や身体を動かすことができるようになっているのでなかつたならば、いくらか機械的に教育しても訓練しても決してよい結果があらわれないという。だから学校で「常に正しく座れ」とか「腕を真直ぐに伸ばせ」とかいうようなことを、ただ繰返してはいいかにも生気のない教授に終るであらう。

幼年期から身体を各方面に平均に訓練しておけば、生活のあらゆる境遇にあつて、また職務上のあらゆる仕事に向かつて常に強

健な活発な身体を保ち、権威ある態度を持ち、身体の儀容を整えることができる。このように考えてフレーベルの体育論はきわめて現代的であるといふことができる。

8 自然観察

事物の知識は、事物そのものおかれて位置や周囲の事物と関係させることによつて最も明瞭に確実にえられるのである。それゆえに子どもたちが自然を研究する場合、もし事物がそのありのままの自然的関係においてみられ、自然のままの関係から認められるならば、必ず子どもたちは事物の本質も最も明瞭に洞察することができるであらう。

また子どもたちは事物や事物の種々なる働きが自分と最も近く、たえず自分を取巻いているのを見るならば、またそれらの事物の存在の理由が恐らく自分自身のなかにあり、少なくとも自分自身からいって、また自分自身へ関係しているような場合であれば、最も明瞭に確実に事物の関係や状態や事物の意義などを最もよく知るであらう。

たとえば、そのものが最も手近にあり、最も近き周囲にあるものであれば、すなわち自分の部屋、家屋、庭園、田畑、村落（または市街）、牧場、野原、森や林、平原などのなかにある事物で

あれば最もよくこれを知るであろう。このように最も手近な周囲から、すなわち部屋の事物の観察から出発して自然および外界の観察へと秩序を辿り、秩序を立ててすすんでいくことがたいせつである。それはより近きものやよく知られているものから、次第により遠きものやよく知られていないものへとおよんでいくことでもある。そしてこのように秩序づけたり、総括したりしたのちに、再び分析するように組織すれば、自然観察も立派な学校の教授題目となるのである。

フレーベルのこの教授法は今日新教育で強調している生活学習や体験学習とも一脈通ずるようである。フレーベルはさらに続けていっている。教師はすべからく生徒に動物をその棲息している場所に関係して観察させたり、植物もその場所に応じて観察させたり、屋内植物、温室植物、庭園植物、野生の植物、草地の植物、森林の植物、水生の植物、沼沢植物、寄生植物などに分類させたりするがよい。次には同様の視点から、土鉱類を説明したり、同様な方法で同様な視点からさまざまな自然現象、たとえば陸地や空気や水や火などの現象を説明するがよい。

右のようにまず自然観察をさせながら、次第に自然研究や自然記述へ、さらに博物学へと指導するならば、やがて子どもは、生活や生活との利害関係を通じて人間に最も交渉の深い動物の観察

に重点を置くであろう。要するにフレーベルの教授法に従えばすべての人間からいって人間へかえること、生徒の最も手近な環境からいって、結局もとのところへ立ち戻るといふ方法をとることがたいせつであるという。

9 数観念の発達

数の観念の発達はフレーベルによれば言葉や描画の発達にともなうものである。そしてそれはすでに幼児期の描画活動にあらわれている。幼児期における数の観念の発達と指導についてはフレーベルは『人間教育』の第一章の「幼児期における人」で少し述べており、さらに第四章の「生徒としての人」の「算術の練習」という項目で、学級内における算数教授法を述べている。

かれによれば学齢期までに子どもは遊びをとおして少なくとも十から十二ぐらいまでの数を数えられる。たとえば子どもが事物を図であらわすことを覚え、それで事物を観察するようになれば、やがて同種類の同数の事物が常に相関連してあらわれることがわかる。

すなわち人間には二つの眼と二本の腕、二本の足のあること、五本の手指と五本の足指のあること、また甲虫や蠅には各々六本の脚があることなどを認めるようになる。こうして子どもは図を

描くことによつて数を注意しはじめ、数の知識をえるようになる。また同一の事物がたびたびあらわれれば、子どもはそれによつて数の觀念が起こされる。同種類の物がいろいろの形で集合している時には、子どもはその事物のそれぞれの数を知らうとする。このように数を注意し、その知識をえて、次第に計数の能力が覚醒され、発達させられると、子どもの知識範囲は広くなつてくる。この発達によつて子どもの生命の本質的な要求やその憧憬などは満足させられるのである。これまでは子どもは事物の量の多少や、同種類の差異についてはただおぼろげな感情しかもつていない。すなわち事物の種々なる集合の数量的關係を認めたり理解したり、確定したりすることはできなかった。

ところがいまや描画することによつて、それができるようになる。たとえば大きな石が二つ、小さな石が三つあるとか、白い花が四つ、黄色の花が五つあるとかいうように、物の数量的關係を知るようになる。そして数量的關係を知るとは、児童の生活を非常に向上させるものである。

10 フレーベルと新教育運動

人は誰でもアメリカにおける新教育運動を探究する時、そこにフレーベル教育学の根底をなす児童中心主義の原理や創造的自己

活動の原理や労作の原理や個性の原理、そして社会の原理が、ひどく高調されているのに気づくであろう。この運動は次第に發展してチャイルドセンタースクールや、プロジェクトメソッドや、ダルトンプランや、ウィネットカシテムやブラットンプランやフアークブックプランとなり、さらにキルバトリックを中心とするコンミュニティスクールの運動ともなつた。このように考へて、アメリカにおける新教育運動の源泉にフレーベルの教育思想が一つの重要な位置をしめているといつてよい。さればこそ、パウ・モンローも「フレーベルの教育原理を幼稚園以上の高い教育段階に適用しようとする現代および将来の試みは、結局真のフレーベル運動にほかならない」といつている。

周知のとおりデュイの創設したシカゴの実験学校はフレーベルの教育思想と原理と方法との応用であり具体化であるといつてもよい。デュイは『学校と社会』の第五章「フレーベルの教育原理」のなかに「この小学校はその全課程―四歳から十三歳までの児童が在学している―を通じてフレーベルがおそらく初めて意識的に提唱した、あの一連の原理を實行しようと努力していることを暗示するものである」といつている。しかもデュイは、これを明らかに、フレーベルの教育原理を幼稚園以上の教育段階にも適用しようとしたフレーベル運動にほかならないと述べてい

る。デュイイはさらにフレーベルの教育原理として次のものをあげている。

一 学校の第一の仕事は協力的・相互扶助的な生活の仕方について児童を訓練し、かれらのなかに相互依存の意識を養い育て、かれらを実際に助けてこの精神の明白な行爲として実行させるような調整をなさせることであること。

二 すべての教育活動の根本は児童のもろもろの本能・衝動的な態度および活動にあるのであって、他人の観念を借りるにせよ、あるいは自己の感覚に訴えるにせよ、とにかく外部的な材料を提示し適用することにあるのではないということ。

したがってまた児童の数限りない自発的活動、すなわち遊戯や競技や物真似、または幼児の一見無意味な動作―今までつまらぬもの、無用なものとして無視されるか、それとも、積極的に邪悪なものとして難ぜられさえした現象はこれを教育的に用いることができる。

三 これらの個人的な傾向ならびに活動は、さきに述べた協力的な生活の仕方を維持する上に用いられることを通じて組織され、指導されるが、それはこれらの傾向や活動を利用して、児童が最後にはそのなかに入る、より大なる、より成熟した社会の典型的な営みおよび仕事を児童の程度に応じて再

現することを意味するのである。そしてまた児童の生産と創造的な仕事とを通じて、価値ある知識を獲得し確保するものである。

以上のようにデュイイはフレーベルの教育原理を平易に再現し、すすんで「以上の説明がフレーベルの教育哲学を正確に代表している限りにおいては、この小学校はフレーベルの教育思想の主唱者と見なされるべきである」といつている。このようにしてシカゴ大学の実験学校では前にあげたもろもろの活動をできるだけ忠実に正確に、四歳から十三歳までの児童に適用した。しかもその全過程はほとんど、全くフレーベル幼稚園の精神をもつて一貫していたとみることができる。

事実今日のアメリカの小学校を参観すると、幼稚園のない小学校はほとんどなく、しかもその教育内容や方法は幼稚園教育からの自然的な連続発展であつて、決してわが国において現に見受けられるように、幼稚園教育の理論と小学校教育のそれとが別個になつていたり、幼稚園が小学校の縮図ないしは複製品であつたりするのは異つて、幼稚園は小学校教育の初級ないし基底として、小学校教育に密接に関連するようになつている。したがつて幼稚園と小学校低学年とは「幼年教育」として分離できない内面的な一連として考えられている。

(広島大学)